

# アリストテレス『形而上学』Γ(第4)巻第2章における《オー ン・アントローポス》, 《ヘイス・アントローポス》, 《アン トローポス》を用いた議論について: 1003b26-32 注解

## A Commentary on Aristotle's *Metaphysics* Γ2, 1003b26-32

坂 下 浩 司

Koji SAKASHITA

### 要 旨

解釈上の分岐が非常に多く容易に道が見失われてしまうアリストテレス『形而上学』Γ(第4)巻第2章 1003b26-32 についての注解。「はじめに」で、『形而上学』の写本に関する文献学的諸事情を説明し、問題となる箇所的主要な読みを提示する。主要な理論的対立として Ross と Cassin & Narcy に着目する。「第I章」で、Ross の本文と注釈について、その工夫を見て、問題点を指摘する。「第II章」で、Cassin & Narcy による二系統の有力写本の考察、彼ら自身の説の提示、彼らの Ross 批判を見る。「第III章」で、Cassin & Narcy の批評し、Ross の問題点をクリアーしてはいるが新しく問題が生じさせていると判断する。トマス注解を見て、同じく Ross の問題点をクリアーしており、Cassin & Narcy の問題を生じさせないので、トマスの解釈がよいとする。

### はじめに: 文献学的諸事情の説明と問題となる箇所的主要な読みの提示

本注解が表題箇所を取り上げるのは、その箇所の解釈上の分岐が非常に多く容易に道が見失われてしまうからである。解釈上の根本的な分岐はギリシア語本文から始まっているが、すでに、それを確定する手がかりとなる基礎的な写本レベルで生じている。

『形而上学』の諸写本の基本的な系列は、大きく  $\alpha$  と  $\beta$  の二つに分けられている<sup>1)</sup>。 $\alpha$  系写本を代表するのが E 写本 (Parisinus Graecus 1853: 10 世紀) および J 写本 (Vindobonensis Phil. Graecus

1) 近年は、 $\alpha$  と  $\beta$  の上流に共通の究極の源泉として大文字  $\Omega$  や、 $\Omega$  と  $\alpha$  および  $\beta$  の間に小文字の  $\omega$  が用いられた上付き文字が付いた  $\omega^{\text{sup}}$  という記号も使われはじめている (たとえば Kotwick, 2016, p.282)。従来は、 $\alpha$  および  $\beta$  の上流を「写本の系統図」(Stemma codicum) に書くことはなかった。

100: 9 世紀) であり<sup>2)</sup>, β 系写本を代表するのが A<sup>b</sup> 写本 (Laurentianus 87.12: 12 世紀) である<sup>3)</sup>。

α と β は, Primavesi, 2012b, p.457 によれば, それぞれ独立して古代写本へと廻り, α バージョンの方が, 紀元後 6 世紀のギリシア注釈家で『形而上学』の最初の七つの巻の注解が残っているアスクレピオスに知られまた使用されていた——それで α の本文は紀元後 500 年までには回覧されていたと想定される——のに対して, β バージョンの方は, 「キャッチワード」(“catchwords”) あるいは「キャッチライン」(“catchlines”)<sup>4)</sup> の Jaeger(1912 年) による研究から七つに分かれていたと推測されるパピルスの巻物の, おそらく, 紀元後 400 年より前 (300 年代) の<sup>5)</sup>, 刊本の痕跡を示している。しかしだからといって, 単純に β を優先させればよいというわけではない。紀元前 1 世紀に再発見され編纂された, そして紀元後 200 年頃にアレクサンドロスによって使われた, 「オリジナルの本文」(“original text”) を, α と β のどちらのバージョンも, 代表してはいない。α も β も, かなり多くの箇所得意図的に本文に介入した形跡があるからである。しかし, その介入の性格が β と α では大きく異なり, 本文校訂上の価値が同じになるわけではない。

β バージョンは, Primavesi, 2012, p.457 によれば, 「或る改訂者の所産」(“the product of a reviser”) であって, この者は写本の言い回しや本文を変更したが, これは, その誤りを正すため, あるいは, それをもっと分かりやすく明晰にするためであった。この「β 改訂者」(“β-reviser”) は, 筆記上の

- 
- 2) J 写本は, E 写本より古いのであるが, A (第 1) 巻全部と α (第 2) 巻の第 1 章を欠いていたため, 19 世紀末の Gercke によってその価値が認められるまでは, 『形而上学』本文の初期の編者たちによって見過ごされていた (たとえば Gercke より前の Christ は, 校訂に, α 系は E 写本, β 系は A<sup>b</sup> 写本しか使わなかった)。
- 3) 上付き文字「<sup>a</sup>」という記号法が奇妙に思われるかもしれない。これは, ベッカー版全集第 1 巻の, 写本記号の一覧表を見ると分かるのだが, A から Z までを写本に割り振ったあと, 上付き文字「<sup>a</sup>」を A から Z までに付けて A<sup>a</sup> から Z<sup>a</sup> という記号を作り別の写本に割り振り, さらにまた, 上付き文字「<sup>b</sup>」を付けて A<sup>b</sup> から Z<sup>b</sup> という記号を作ったのである。実際的には, 『形而上学』の根本的な研究をする際, 写本記号の一覧表として, Bernardinello, 1970, pp.17-18 の *Conspectus siglorum* を書き写して携帯するのが便利である。
- 4) ラテン語で “reclamantes”, ドイツ語で “Kustoden” とも言う。パピルスの巻物が長くなりすぎて分割されるときに, つなぎ目の印として, 分割した前半の巻物のおわりと後半の巻物の始めにわざとダブらせた, 後半の巻物の始めの言葉のこと。パピルスの巻物の内容が羊皮紙の冊子に移され, 分割されていた文書が結合される際, もはや必要なくなったダブった言葉もそのまま書き移され, 同じフレーズが二度登場することになる。このキャッチワードがあると, その羊皮紙冊子本の直近の前身がパピルス卷子本であったと推定される。また, 大きな書物であると, 全体がいくつのパピルス卷子本に分かれていたかも推定可能である。『形而上学』の β バージョンの場合, Primavesi, 2012, p.391, nn.21-26 によれば, 切れ目は六つあり, A + α / B + Γ / Δ + E / Z + H / Θ + I / K + Λ / M + N, の七つのパピルス卷子本に分かれていた。六つの切れ目のうち, Γ / Δ, H / Θ, I / K の三つの切れ目には明らかな証拠が認知されており誰からも異論が出ないであろうし, 対応する Primavesi, 2012, p.391 の注 22, 24, 25 も短い, α / B, E / Z, Λ / M の三つの切れ目については, 先行研究の Jaeger を批判せねばならないこともあって, 対応する Primavesi, 2012, p.391 の注 21, 23, 26 も長めである。後者の三つについては, 議論はあるかもしれないが, 私は説得力があると考え。
- 5) パピルス学 (papyrology) の知見によれば, 羊皮紙の冊子本の使用は紀元後 2 世紀に始まったが, 3 世紀のおわりまで羊皮紙冊子本とパピルス卷子本が平行して使われて, 4 世紀のおわりまでにはパピルス卷子本はほぼすたれてしまった。したがって, このように, 300 年代代だだろうと推定できるわけである (Kotwick, 2016, p.5; Bülow-Jacobsen, 2009, pp.24-25. 特に Table.1.2: The replacement of the volumen by codex のグラフを見ると, このことがよく分かって興味深い)。

誤りを正そうと試みたのだが、修正が試みられた誤りは、 $\alpha$ にはなお残存しているがアレクサンドロスによってコメントがなされている当の本文には存在しないものである。このことが示唆するのは、 $\alpha$ と $\beta$ の両方のバージョンにとって先行する共通の本文——「共通本文」(“*common text*”)——があり、この「共通本文」はアレクサンドロスが使用した諸写本よりもわずかに誤りの多いものだったということである。「 $\beta$ 改訂者」がこの「共通本文」を改訂する際のアイデアの主たる源泉は、アレクサンドロスの『形而上学』注解であった。このことは、「 $\beta$ 改訂者」が本文をアレクサンドロスの言葉の「誤解」(“*misunderstanding*”)に基づけている場合、特に明らかになる。また、「 $\beta$ 改訂者」による本文への介入がアレクサンドロスによるパラフレーズに依存しているケースもある。このような事情において注目すべきことは、 $\beta$ バージョンの本文とアレクサンドロスの注解が、いっしょに——羊皮紙の一つのページ上でアレクサンドロスの大量の注解が本文を取り囲む形で——筆写され伝えられていることである。恒常的に「 $\beta$ 改訂者」がアレクサンドロスに依存していることは、伝承の「明らかな『開始点』」(“*a clear terminus post quem*”)となっている。

それに対して、『形而上学』A(第1)巻の $\alpha$ バージョンの特徴は、Primavesiが「 $\alpha$ 補完部」(“ *$\alpha$ -supplements*”)と呼ぶ語句が一定数存在することである。これは、 $\beta$ バージョンには欠如しており、アレクサンドロスによって言及されてもおらず、 $\alpha$ バージョンでこの語句が登場している当の議論に必要なばかりか純粋にシンタクスの点からしても必要とされない——要するにその場所にあってもなくてもその箇所の全体としての意味を変化させない——語句のことである。Rossはこの「 $\alpha$ 補完部」(もちろんRossはこの用語を使っていない)が $\beta$ バージョンに欠けているのはほとんど常に機械的な脱落によると想定したが、もし仮に機械的な脱落だったとすると、意味の点で常に影響を与えることなく機械的に脱落するというのはありそうにない。「 $\alpha$ 補完部」は、むしろ、 $\alpha$ バージョンにおける「共通本文」への後世の補完であることの方がありそうであって、この「 $\alpha$ 補完部」を除けば、 $\alpha$ バージョンは、多かれ少なかれ、「共通本文」と同一であるように思われる(Apart from the supplements,  $\alpha$ -version seems to be more or less identical with the *common text*)とPrimavesiは言う。Primavesiによれば、 $\alpha$ の伝承された言い回しそれ自身は、あまり意図的な介入にしたがうものではなく、 $\alpha$ のこの「一般的な保守的姿勢」(general conservatism)が示唆することは、「 $\alpha$ 補完部」は、本文を変更する試みに遡るものではなく、むしろ、おそらく教育目的の欄外注記が本文中に紛れ込んだものであり、十分注意しよく吟味しながら扱われなければならない。この「 $\alpha$ 補完部」が、A(第1)巻以外にどれくらい認められるかは今後の写本研究の進展を待たねばならないが、確かに $\Gamma$ など他の巻でも注意を払わねばならない。

$\alpha$ 系写本と $\beta$ 系写本を比較すると、 $\beta$ 系写本の文は、概して、なめらかで読みやすくまた理解しやすくなっており、以上の考察からすると、それは修正の結果であり、西洋古典文献学の原則である“*lectio difficilior*”(理解が困難な読みの方をもととの読みとして採ること)からして、一般的にも、 $\alpha$ 系写本の読みを採るのがよいと考えられている。

では、同一箇所でも $\alpha$ と $\beta$ が異なる場合は「保守的な」 $\alpha$ の読みをすべて採用すればよいのだろうか<sup>6)</sup>。だが、残念なことに、そのように単純化することもできそうにない。Kotwick, p.7, n.32によれば、筆写上の誤りが $\alpha$ にも $\beta$ にも見られるのであって、 $\alpha$ の読みがすべて“*lectio difficilior*”として採られるべきとまでは言えないのだ。

すると、一般原則として $\alpha$ 系写本を重視しつつも、 $\beta$ 系の知識が不要となることはなく、むしろ

6) 実際、 $\Gamma$ 巻のテキスト・訳・注釈を刊行したCassin/Narcy(1989年)はこの方針をとった。

β系と比較してαにしかない読みであれば、それをもはや純文献学的な考察ではない——すぐれた意味での哲学的考察により——よく吟味しつつ、総合的に判断を下さねばならないということになるのである。近年の文献学的研究の成果は当然尊重されねばならないが、結局、哲学的思考が無用になることはないわけである。

さて、では、現在よく利用されている代表的なテキストとして、Ross版(1924年)およびOxford Classical TextシリーズのJaeger版(1957年)を、近年の成果としては、Cassin & Narcy(以後C.&N.)版(1989年)とHecquet-Devienne(以後H.-D.)版(2008年)を挙げ、それらのもととなった有力写本としてβ系のA<sup>b</sup>とα系のEJの読みを挙げよう。問題の焦点となるのは、私の見るところでは、Rossの本文とその基礎となった彼の考察、そして、それを正面から批判し根本的に別の本文を立てたC.&N.の対立である。

### 【Ross版の1003b26-32】

b26 ταὐτὸ γὰρ εἷς ἄνθρωπος καὶ ἄνθρωπος,  
 27 καὶ ὦν ἄνθρωπος καὶ ἄνθρωπος, καὶ οὐχ ἕτερόν τι δηλοῖ κατὰ  
 28 τὴν λέξιν ἐπαναδιπλούμενον τὸ εἷς ἄνθρωπος καὶ εἷς ὦν  
 29 ἄνθρωπος  
 b29 (δηλον δ' ὅτι οὐ χωρίζεται οὗτ' ἐπὶ γενέσεως οὗτ'  
 30 ἐπὶ φθορᾶς), ὁμοίως δὲ καὶ ἐπὶ τοῦ ἑνός, ὥστε φανερόν ὅτι  
 31 ἡ πρόσθεσις ἐν τούτοις ταὐτὸ δηλοῖ, καὶ οὐδὲν ἕτερον τὸ ἐν  
 32 παρὰ τὸ ὄν,

### 【Jaeger版の1003b26-32】

b26 ταὐτὸ γὰρ εἷς ἄνθρωπος καὶ ὦν ἄνθρω-  
 27 πος καὶ ἄνθρωπος, καὶ οὐχ ἕτερόν τι δηλοῖ κατὰ τὴν λέξιν  
 28 ἐπαναδιπλούμενον τὸ εἷς ἐστὶν ἄνθρωπος καὶ ἔστιν εἷς ὦν  
 29 ἄνθρωπος·  
 b29 δηλον δ' ὅτι οὐ χωρίζεται οὗτ' ἐπὶ γενέσεως οὗτ'  
 30 ἐπὶ φθορᾶς, ὁμοίως δὲ καὶ ἐπὶ τοῦ ἑνός· ὥστε φανερόν ὅτι  
 31 ἡ πρόσθεσις ἐν τούτοις ταὐτὸ δηλοῖ, καὶ οὐδὲν ἕτερον τὸ ἐν  
 32 παρὰ τὸ ὄν,

### 【C.&N.版の1003b26-32】

b26 — ταὐτὸ γὰρ εἷς ἄνθρωπος καὶ ὦν ἄνθρω-  
 27 πος καὶ ἄνθρωπος, καὶ οὐχ ἕτερόν τι δηλοῖ κατὰ τὴν λέξιν  
 28 ἐπαναδιπλούμενον τὸ ἐστὶν ὁ ἄνθρωπος καὶ ἄνθρωπος καὶ εἷς  
 29 ἄνθρωπος·  
 b29 δηλον δ' ὅτι οὐ χωρίζεται οὗτ' ἐπὶ γενέσεως οὗτ'  
 30 ἐπὶ φθορᾶς, ὁμοίως δὲ καὶ ἐπὶ τοῦ ἑνός· ὥστε φανερόν ὅτι  
 31 ἡ πρόσθεσις ἐν τούτοις ταὐτὸ δηλοῖ, καὶ οὐδὲν ἕτερον τὸ ἐν  
 32 παρὰ τὸ ὄν·

## 【H.-D. 版の 1003b26-32】

b26 — ταὐτὸ γὰρ εἷς ἄνθρωπος καὶ ὦν  
 27 ἄνθρωπος καὶ ἄνθρωπος, καὶ οὐχ ἕτερόν τι δηλοῖ κατὰ τὴν λέξιν  
 28 ἐπαναδιπλούμενον τὸ ἐστὶν ὁ ἄνθρωπος καὶ ἄνθρωπος καὶ εἷς  
 29 ἄνθρωπος·  
 b29 δῆλον δ' ὅτι οὐ χωρίζεται οὐτ' ἐπὶ γενέσεως οὐτ'  
 30 ἐπὶ φθορᾶς, ὁμοίως δὲ καὶ ἐπὶ τοῦ ἐνόχ· ὥστε φανερόν ὅτι  
 31 ἢ πρόσθεσις ἐν τούτοις ταὐτὸ δηλοῖ, καὶ οὐδὲν ἕτερον τὸ ἐν  
 32 παρὰ τὸ ὄν·

C. &N. によれば、写本では、それぞれ次のようになっている。

【A<sup>b</sup> 写本の 1003b26-29 (C. &N., p.146)】

A<sup>b</sup>: b26 ταὐτὸ γὰρ εἷς ἄνθρωπος καὶ ἄνθρωπος  
 27 καὶ ὦν ἄνθρωπος καὶ ἄνθρωπος, καὶ οὐχ ἕτερόν τι δηλοῖ κατὰ  
 28 τὴν λέξιν ἐπαναδιπλούμενον τὸ εἷς ἐστὶν ἄνθρωπος καὶ ἔστιν<sup>7)</sup>  
 29 ἄνθρωπος·

## 【EJ 写本の 1003b26-29 (C. &amp;N., p.146)】

EJ: b26 ταὐτὸ γὰρ εἷς ἄνθρωπος  
 27 καὶ ὦν ἄνθρωπος καὶ ἄνθρωπος, καὶ οὐχ ἕτερόν τι δηλοῖ κατὰ  
 28 τὴν λέξιν ἐπαναδιπλούμενον τὸ (τί E<sup>8)</sup>) ἐστὶν ὁ ἄνθρωπος καὶ ἄνθρωπος καὶ εἷς

7) 1003b28-29 で C.&N. 版の A<sup>b</sup> 写本の二つ目 (b28 末) の「エステイン」の「ティン」に重アクセント記号があるかないかで C.&N. の apparatus からの情報と注釈からの情報とで不一致である (細かく言えば、一つ目の「エステイン」の「ティン」に重アクセント記号があるかないかも H.-D. の apparatus からの情報と C.&N. の apparatus および注釈からの情報とで異なっている)。

A<sup>b</sup> 写本 b28-29 (H.-D. の apparatus からの情報) : τὸ εἷς ἐστὶν ἄ. καὶ ἔστιν ἄ.

A<sup>b</sup> 写本 b28-29 (C.&N. の apparatus からの情報) : [τὸ] εἷς ἐστὶν ἄ. καὶ ἔστιν ἄ.

A<sup>b</sup> 写本 b28-29 (C.&N., p.164 の注釈からの情報) : τὸ εἷς ἐστὶν ἄ. καὶ ἔστιν ἄ.

C.&N. の apparatus からの情報の二つ目 (b28 末) の「エステイン」は、「エステイン」の「ティ」にアクセント記号が付いていること (“ἐστὶν ἄ.”) が奇妙で、C.&N., p.164 の注釈からの情報の “ἐστὶν ἄ.” と一致していない (写本に “ἐστὶν ἄ.” と書かれているのなら、そのとおり報告するしかないが)。

8) E 写本の “ti” という読みについて、H.-D. (p.109, n.3) は、次のようにすれば E 写本の読みを保持できるだろうとする。すなわち、‘ti’ について読みの誤りを想定し、別の句読法を採用することである。H.-D. によると、実際、‘γάρ’ は、大文字のガンマ (Γ) から出来た記号によって略されうるが、この記号の横の線は縦の小さな線によってクロスされる。この記号は、9 世紀から用例があるのだが、タウイオータの言葉 (= ‘ti’) の筆跡ととても似ており、写字生によって誤って解されたというはありうる。その場合、テキストは次のように読まれるだろう。« ... c’ est-a-dire qu’ils ne désignent pas autre chose en fonction de l’expression. [筆者のコメント：ここでピリオドになっており (= οὐχ ἕτερόν τι δηλοῖ κατὰ τὴν λέξιν.)、次から新しく文が始まることに注意。] *En effet* [= γάρ], “Thomme”,

## 29 ἄνθρωπος·

【(参考再掲) C.-N. 版の 1003b29-32 = H.-D. 版の 1003b29-32】

b29 δῆλον δ' ὅτι οὐ χωρίζεται οὐτ' ἐπὶ γενέσεως οὐτ'  
 30 ἐπὶ φθορᾶς, ὁμοίως δὲ καὶ ἐπὶ τοῦ ἐνός, ὥστε φανερόν ὅτι  
 31 ἢ πρόσθεσις ἐν τούτοις ταυτὸ δηλοῖ, καὶ οὐδὲν ἕτερον τὸ ἐν  
 32 παρὰ τὸ ὄν·

それぞれの本文の特徴を記述する。

まず, b26-27 が, Ross では, “ταυτὸ γὰρ εἷς ἄνθρωπος καὶ ἄνθρωπος, καὶ ὄν ἄνθρωπος καὶ ἄνθρωπος” である (“εἷς ἄνθρωπος καὶ ὄν ἄνθρωπος καὶ ἄνθρωπος” という三つの項の同一性が “ἄνθρωπος” を媒介にして述べられる) のに対し, Jaeger では, “ταυτὸ γὰρ εἷς ἄνθρωπος καὶ ὄν ἄνθρωπος καὶ ἄνθρωπος” である (三項の同一性が無媒介に述べられているように見える)。Ross は A<sup>b</sup> 写本を活かし, Jaeger は, C.-N. と H.-D. と同じく, EJ 写本を活かしている。

次に, b28-29 が, Ross では, “τὸ εἷς ἄνθρωπος καὶ εἷς ὄν ἄνθρωπος” であるのに対し, Jaeger では, “τὸ εἷς ἐστὶν ἄνθρωπος καὶ ἔστιν εἷς ὄν ἄνθρωπος” である。Ross は独自の提案を打ち出している。Jaeger は, A<sup>b</sup> 写本の読みを採るが, 最後に Ross 案 “εἷς ὄν ἄνθρωπος” を上乘せしているのだから, 実質的に Ross 案に賛成していると言えよう。EJ 写本を活かしているのは, C.-N. と H.-D. であり, “τὸ ἐστὶν ὁ ἄνθρωπος καὶ ἄνθρωπος καὶ εἷς ἄνθρωπος” としている。

先述のように現在では α 系重視の姿勢が一般的であるので, どちらの行でも α 系の EJ 写本を重視する C.-N. と H.-D. はその点だけでも説得力をもつ。しかし, Ross が独自の提案を打ち出しているのにもそれなりのかなりもっともな理由があり, それに対処する学問上の必要性がある。実際, C.-N. がその対処をしている。これら二つの箇所について言えば, Jaeger は, 前者は C.-N. と同じ (H.-D. は C.-N. と同じ) であり, 後者は実質的に Ross 案に賛成するのであるから, ここでの考察は Ross と C.-N. に絞られる。

## 第 I 章 Ross の本文と注釈: その工夫と苦心および問題点

1003b28-29 について, Ross が独自の提案を打ち出しているのであったが, その提案に踏み切った理由は, b28-29 そのものにあるのではなく, 実は b30 の “ὁμοίως δὲ καὶ ἐπὶ τοῦ ἐνός” の理解にある。

Ross は, この, 訳せば, 「《一》(ヘン) についてもまた同様である」というだけの単純な語句についてこだわり, 次のようにコメントする。すなわち, この語句が含意しているのは, 「先行する箇所——これがすなわち b27-29 である——においてアリストテレスが語っていたのは《一》(ヘン) についてではなく《存在》(オン) についてだった」ということなのであるが, しかし, そうだと

“un homme” et “un homme *un*” sont «une expression» [= λέξις] redoublée» (ἐπαναδιπλούμενον γὰρ ἔστιν ὁ ἄνθρωπος καὶ ἄνθρωπος καὶ εἷς ἄνθρωπος). しかし, この一節の一般的な意味が同じままである限りにおいて, また, そのうえ, ‘τὸ’ の読みが, 伝承の二つの系統のおおのに証拠があることからしても, J のテキストを保持すると, H.-D. は述べている。

すると、先行する箇所 1003b27-29 について、現在伝わっている読み——すなわち A<sup>b</sup> と EJ の読み——のどれも、「《一》（ヘン）については語っておらず《存在》（オン）について語っている」というようにはなっておらず（どちらのバージョンでも《一》（ヘイス）が登場するので）十分ではない。そこで、まず、Ross は、自分は採らないが誰もがすぐに思いつきそうな案を検討する。すなわち、A<sup>b</sup> で “τὸ εἷς ἐστὶν ἄνθρωπος καὶ ἔστιν ἄνθρωπος” となっており、EJ で “τὸ (τί E) ἐστὶν ὁ ἄνθρωπος καὶ ἄνθρωπος καὶ εἷς ἄνθρωπος” となっている——b28 の “τὸ” 以下では《一》（ヘン）が語られていないどころか《一》（「ヘン」が男性形の「ヘイス」になっている）が議論の中心になっているように見えることを確認していただきたい——ところを、《一》（ヘイス）を消去して《存在》（「オン」が男性形の「オン」にして）に置き換える、

b28 “τὸ ἔστιν ἄνθρωπος καὶ ὢν ἄνθρωπος”

という案である。（繰り返すが、この安直な案を Ross は後で批判し採用しない。）Ross の英訳では “he is a man and an existent man” となる。

こうした場合、その直後の、主語の明記されていない文 “δῆλον δ’ ὅτι οὐ χωρίζεται οὐτ’ ἐπὶ γενέσεως οὐτ’ ἐπὶ φθορᾶς” が、“it is clear that [以下の英語の主語 “his humanity and his existence” が、明記されていないギリシア語の主語の、Ross による補いである] his humanity and his existence are not separated either on their coming to be or in their ceasing to be” と訳されることになる。ここで、“his humanity”（「彼の人間性」）が、“τὸ ἔστιν ἄνθρωπος”（「人間である」(ἐστὶν ἄνθρωπος) という “ἐστὶν” で始まる二語文を中性の冠詞 (τὸ) を引用符代わりに使って引用したものは「人間の本質」を表す）つまり “he is a man” に対応しており、“his existence”（「彼の實在」）が、“ὢν ἄνθρωπος”（存在する人間）つまり “an existent man” に対応している。そして、この箇所の論点は、「人間の本質に實在を付加しても『（人間とは）別のなにかを明らかにしないだろう』（“οὐχ ἕτερόν τι δηλοῖ”）」ということになる。

それで、Ross の b30 “ὁμοίως δὲ καὶ ἐπὶ τοῦ ἐνός”（「《一》（ヘン）についてもまた同様である」）についての解釈へ移ると、ここで言われた「人間の本質に～を付加しても『（人間とは）別のなにかを明らかにしないだろう』」ということは、肯定的に言えば、「人間の本質に～を付加することは、《人間》において含意はされているがはっきり表現されていない特性を明らかにするはたらきがある」ということであり、このことが、《一》についても「同様に」あてはまるという読み筋になる——直前の “δῆλον δ’ ὅτι οὐ χωρίζεται οὐτ’ ἐπὶ γενέσεως οὐτ’ ἐπὶ φθορᾶς” は、Ross では丸括弧（本文中のこのような細かな記号類も解釈の分岐となる）に入れられ挿入扱いされており、その前の文と「同様である」（“ὁμοίως”）と議論が流れることになる——ので、「人間の本質に《實在》を付加することと同様に《一》を付加しても『（人間とは）別のなにかを明らかにしないだろう』」ということ、「人間の本質に《一》を付加することは、《實在》を付加することと同様に、《人間》において含意はされているがはっきり表現されていない特性を明らかにするはたらきがある」ということに、Ross のこの（やや安直な）仮想案では、なるわけである。

しかし、Ross は、この仮想案を、ただちに次のように批評する。すなわち、そうすると、そのように本文を変更され解釈された b27-29 は、直前の b26-27 の “ταὐτὸ γὰρ εἷς ἄνθρωπος καὶ ὢν ἄνθρωπος καὶ ἄνθρωπος” とほとんど同じで、「いくぶん精彩を欠いた繰り返し」(a rather tame repetition) となってしまう、さらに、b28 の “τὸ ἔστιν ἄνθρωπος καὶ ὢν ἄνθρωπος” における “ἐστὶν” 「少々

疑わしい」(somewhat suspicious) し<sup>9)</sup>, b26-27における「人間」と「実在する人間」という項の関係から, b27-29における「彼は人間である」と「彼は実在する人間である」という命題の関係へと移行しても, 新しいポイントは出てこない。

ここで, Ross 独自の提案が登場する。それが, ギリシア注釈家のシュリアノスの『「形而上学」注解』に登場するフレーズ “εἷς ὄν ἄνθρωπος” (61,7) を使った,

b28-29 “τὸ εἷς ἄνθρωπος καὶ εἷς ὄν ἄνθρωπος”

である。このように読んだときの解釈は, 次のようになる。Ross の本文を, ポイントを明示しつつ再掲し, それの Ross 自身の英訳 (そして訳から直接には分からないことの Ross による説明) を挙げる。

【Ross 版の 1003b26-32】(ポイントを明示しながら)

b26 ταὐτὸ γὰρ εἷς ἄνθρωπος καὶ ἄνθρωπος, 【“ἄνθρωπος” への “εἷς” の付加】

27 καὶ ὄν ἄνθρωπος καὶ ἄνθρωπος, 【“ἄνθρωπος” への “ὄν” の付加】

καὶ οὐχ ἕτερόν τι δηλοῖ κατὰ

28 τὴν λέξιν ἐπαναδιπλούμενον τὸ εἷς ἄνθρωπος καὶ εἷς ὄν

29 ἄνθρωπος 【“εἷς ἄνθρωπος” への “ὄν” の付加】 (……丸括弧内省略……)

30 ὁμοίως δὲ καὶ ἐπὶ τοῦ ἐνός, 【“ὄν ἄνθρωπος” への “εἷς” の付加と解される】

【Ross 訳 (Oxford 訳) の 1003b26-32】

b26 for ‘one man’ and ‘man’ are the same thing,

27 and so are ‘existent man’ and ‘man’,

27-29 and the doubling of the words in ‘one man and one *existent* man<sup>10)</sup>’ does not express anything different (……)

30 and similarly ‘one existent man<sup>11)</sup>’ adds nothing to ‘existent man’

Ross を批評すると次のようになる。すなわち, 解釈が, 有意味に, また, 非常にシンメトリカルに, きれいに,

【“ἄνθρωπος” への “εἷς” の付加】 ←対比→ 【“ἄνθρωπος” への “ὄν” の付加】,

そして,

【“εἷς ἄνθρωπος” への “ὄν” の付加】 ←対比→ 【“ὄν ἄνθρωπος” への “εἷς” の付加】

9) Ross が, この語を疑っているのは, 彼の版の apparatus 欄を見れば分かるとおおり, 彼がこの語を A<sup>b</sup> にあって EJ がないという認識をもっているからであるが, H.-D. による写本の再調査によれば, Ross のこの情報は誤っており, “ἔστιν” は E にも J にも存在するのであって, Ross のこの語への疑いには写本上の根拠がなくなってしまった。

10) Ross によるイタリックが ‘one *existent* man’ の ‘*existent*’ の部分であることに注意。なお, この文を Ross はコメントリーでは, “one *existent* man’ adds nothing to ‘one man’” と言い換えている。訳の次の行の “one *existent* man’ adds nothing to ‘existent man’” に合わせた説明をしたのである。

11) Ross によるイタリックが今度は ‘one *existent* man’ の ‘one’ の部分であることに注意。



と、できあがっているのは驚くほどである。しかし、解釈の根拠となるアリストテレスの写本上の根拠がなく、シュリアノスの言葉に頼っていること、また、丸括弧を使って問題の文の直前にある“ὄλον δ’ ὅτι οὐ χωρίζεται οὐτ’ ἐπὶ γενέσεως οὐτ’ ἐπὶ φθορᾶς”を文脈から排除しているのは、自分の解釈の他にテキスト上の根拠がなにかもう少しはないと、恣意的な操作であるように見えることが、Rossの本文および解釈の問題点であろう。したがって、写本上の根拠がない本文は採用せず、また、直前にある“ὄλον δ’ ὅτι οὐ χωρίζεται οὐτ’ ἐπὶ γενέσεως οὐτ’ ἐπὶ φθορᾶς”を文脈から排除しない解釈が必要なのである。

このような問題点のゆえに、Rossの本文および解釈は採用できない。では次に、Rossを批判したC.&N.の説を見てみよう。

## 第II章 Cassin/Narcyによる二系統の有力写本の考察、彼ら自身の説の提示、彼らのRoss批判

C.&N.は、二系統の有力写本をよく考察しRoss批判と自説の提示をおこなっている。重要であるので詳しく紹介する。

まずは、A<sup>b</sup>写本について、次のように考察する。すなわち、b26-27は、「人間」(“ἄνθρωπος” = «homme»)を、別々に、「一人の人間」(“εἷς ἄνθρωπος” = «homme un»)および「存在する人間」(“ὄν ἄνθρωπος” = «homme étant»)と比較している。もしそれらの表現のそれぞれが、「人間」(«homme»)と「等値」(“équivalente”)であれば、それらの表現はそれらの間で等値なのである。そうすると、A<sup>b</sup>写本の中では、常に、「文脈」(“la suite de la phrase”)が、あからさまに問題を引き起こすのだという。つまり、冒頭の[比較の]対称性が、やぶられるのである。というのは、「彼は一人の人間である」(«il est un homme un» = “τὸ εἷς ἐστὶν<sup>12)</sup> ἄνθρωπος”)と、「彼は人間である」(«il est un homme» = “τὸ … ἐστὶν ἄνθρωπος”) [A<sup>b</sup>: b28]の重複しか、計算に入れられていないからである。「彼は、存在する人間である」(«il est un homme étant»)に関しての「対称的な指示」(“l’indication symétrique”)を欠いているように見えるばかりではなく、さらに、考察されている諸表現は繰り返しをしているだけだという事実の力説において、「文」(“la phrase”) [= 諸表現に文の形式を与えること]は全く冗長だと思われ、C.&N.はする(この点はRossと意見を同じくしていることに注意)。実際、「彼は一人の人間である」(«il est un homme un»)という文と「彼は人間である」(«il est un homme»)という文の重複が、「一人の人間」(«homme un»)という表現と「人間」(«homme»)という表現の重複に付け加えるものは見られないからである。

次に、EJ写本の考察に移る。すなわち、いま、EJ写本によって伝えられたテキストが考察されるなら、このテキストが、A<sup>b</sup>写本のそれと比較して、「二重のずれ」(“un double ecart”)を示しているということが分かるという。すなわち、一方で、「人間」(«homme» = “ἄνθρωπος”)は、[A<sup>b</sup>写本でのように]「一人の人間」(“εἷς ἄνθρωπος” = «homme un»)および「存在する人間」(«homme étant» = “ὄν ἄνθρωπος”)とつぎつぎに比較される(“εἷς ἄνθρωπος καὶ ἄνθρωπος καὶ ὄν ἄνθρωπος καὶ ἄνθρωπος”)際の共通の項としてそこにはあることはなく、単に、ひとつづきの言葉 [= b26-27: “εἷς ἄνθρωπος καὶ ὄν ἄνθρωπος καὶ ἄνθρωπος”]の三番目のものになっている。他方で、このひとつ

12) H.-D., p.108, apparatus では重アクセントなしの“ἐστὶν”。

づきの言葉は、今度は、この文章の二番目の部分 [= b27-29: “καὶ οὐχ ἕτερόν τι ... εἰς ἄνθρωπος”] で、完全に取戻される。それは、“ταὐτὸ γὰρ ... καὶ ἄνθρωπος” (b26-27) [= この文章の一番目の部分] から “καὶ οὐχ ἕτερόν τι ... εἰς ἄνθρωπος” (b27-29) [= この文章の二番目の部分] にかけては「語法」(“la grammaire”) が変わっているだけだと言えるほどに完全に取戻される。実際、A<sup>b</sup> 写本が、先ほど言及された言葉 [= “εἰς ἄνθρωπος καὶ ἄνθρωπος”] のおおのに、「彼は…である」(«est» (“ἐστίν ... καὶ ἔστιν”) [A<sup>b</sup>: b28]) という言葉を付け加えているところで、EJ 写本のバージョンはなにも付け加えていない。そんなことはせずに、単に、[この文章の一番目の部分に登場した] 分詞形の「存在する～」または「…である～」(«étant» (“ὄν”)) を、[この文章の二番目の部分に登場する] 直説法現在形の「～は…である」(«est» (“ἐστίν”)) [EJ: b28]) に変換しているだけである<sup>13)</sup>。まさしくそのことによって、文章の流れが、EJ 写本において、[Ab 写本とは] 全く別の意味をもつように思われると C.&N. は言う。[下線による強調は筆者]。すなわち、文章の二番目の部分は、一番目の部分を繰り返すことしかしていない。なぜなら、その二番目の部分は、今度 [= 二番目の部分において] は、「文章の見かけ」(“l'apparence d'une phrase”), あるいはより厳密には、「述語づけの」(“d'une prédication”) 見かけをそれら [= EJ: b26-27: “εἰς ἄνθρωπος καὶ ὄν ἄνθρωπος καὶ ἄνθρωπος”] に与えるようにアレンジされたそれらの言葉 [= EJ: b28-29 “τὸ ἐστίν ὁ ἄνθρωπος καὶ ἄνθρωπος καὶ εἰς ἄνθρωπος”] を、そこ [= 一番目の部分] から取り戻すからである。そして、“λέξις” (b28) という言葉が示しているのは、まさしくその性格 [= 文章の見かけないし述語づけの見かけ] だけが現れているということだと C.&N. はする。すなわち、「述語づけの形式」(“une forme prédicative”) によって連節した今考察中の三つの言葉 [= EJ: b28-29 “τὸ ἐστίν ὁ ἄνθρωπος καὶ ἄνθρωπος καὶ εἰς ἄνθρωπος”] は、“λέξις”, つまり、「言葉のアレンジ」(“un arrangement verbal”) を構成するだけであって、“un λόγος<sup>14)</sup>” を構成しない。なぜなら、「一」や、その他の述語、つまり、「人間」(«homme» = “ἄνθρωπος”), あるいは、「一人の人間」(«homme un» = “εἰς ἄνθρωπος”) は、主語である「[その] 人間」(«[l']homme» = “[ὁ] ἄνθρωπος”) に、なにも付け加えないからである<sup>15)</sup>。“κατὰ τὴν λέξιν ἐπαναδιπλούμενον” という「指示」(“l'indication”) は、こうして、EJ 写本において、そしてただそこでだけ、「論証上の価値」(“valeur d'argument”) をもつのだ。すなわち、問題の三つの言葉を、「構成された／作られた<sup>16)</sup> 表現において」(“dans une expression constituée”) (“κατὰ τὴν λέξιν”) 考察することは、それらの冗長さ(“redondance”) (“ἐπαναδιπλούμενον”) を確認する試金石を与えるという。なぜなら、いかなる「追加の指示」(“designation supplémentaire”) も、その「連節」(“articulation”) を通して明らかになることはないからだ。すなわち、「なにか異なるものを明らかにしはしない」(“οὐχ ἕτερόν τι δηλοῖ”, «(cela) n'indique rien de différent») というわけである。——以上のように、C.&N. は述べ、先に示された本文を提案するに至ったのである。

13) 分詞が定動詞化されていると解しているように思える訳としては C.&N. 以前にもすでに Taylor (1812/2003) がある。“for, one man, and existing man, and man are the same. Nor does it signify any thing different, according to a repeated diction, to say, man is, and man, and one man.” (“existing man” — “man is” の “is” も意味は「存在する／実在する」であろう——については後で述べる。)

14) この “un λόγος” は、《他と区別された意味をもつ独立した一つの文》あるいは《なにか(主語)について別のなにかが述語づけられる文》、《述語づけによって主語以上の意味が出る文》というくらいの意味の「ロゴス」であろうか。

15) ゆえに「ロゴス」ではないということであろう。

16) ここで、「構成された／作られた」(“constituée”) とは、「普通は使わない」という意味だろうか。

次に、1003b29-32へ移り、Ross 批判を以下のように開始する (p.165 の第二段落)。すなわち、Ross は、b30 の “ὁμοίως δὲ καὶ ἐπὶ τοῦ ἐνός” というアリストテレスの注記において、或る困難に直面しているのだが、それは、C.&N. からすれば、「みせかけの問題」(“faux problème”)である。すなわち、Ross にとって、b30 の言葉が暗示していることは、これに先立つ数行において、《一》については話題になってはおらず、ただ《存在》についてだけ扱われていることであるように思われたということなのだが、Ross のこの把握自体がまちがっているというのである<sup>17)</sup>。

ここでの本当の問題は、C.&N. によれば、「本文の議論構造をどう分節化するか」(“l’articulation du texte”)の問題なのであって、つまり、b30 の “ὁμοίως δὲ καὶ” («de même exactement») という句は、どこと対になっているのかの問題である (後述する)。b30 の “ἐπὶ τοῦ ἐνός” («du point de vue de l’un») という句は、直前にある “οὐτ’ ἐπὶ γενέσεως οὐτ’ ἐπὶ φθορᾶς” («ni du point de vue de la génération ni de celui de la corruption») と正確に対をなしている。非常に近い場所にある二グループの言葉の構成 (前置詞「エピ」と属格) が同一であることは、それらの言葉のうちに、「要求されている平行関係」(“un parallélisme voulu”<sup>18)</sup>) を読み取ることを示唆する。すなわち、「ここで明らかなのは、《存在》と《一》の間に分離はないということであり」(“il est manifeste qu’ il n’y a pas de séparation entre l’être et l’un,”<sup>19)</sup>)、「それ [= 分離] を人が置くのは、生成と消滅の観点、すなわち、《存在》のそれ [= 観点] から、あるいは、《一》の観点からなのである」(“qu’ on se place du point de vue de la génération et de la corruption, c’est-à-dire celui de l’être, ou du point de vue de l’un.”)。「その厳格な同値関係に二つの (《存在》と《一》の) 観点があること」(“cette rigoureuse equivalence des deux points de vue”) が「この箇所全体の考察目的」(“l’objet de tout le passage”) をなすと C.&N. は言い、アリストテレスのテキストをパラフレーズしていくが、そのパラフレーズの核心は、「アリストテレスは彼の結論について二重の定式を与えている」(“Aristote donne de sa conclusion une formulation double”) が、彼がそうしているのは「《存在》が《一》よりも先であるとかその逆の (《一》が《存在》よりも先であるという) 考えを完全に回避することを正確に目指して」(“destinée précisément à éviter toute idée d’une priorité de l’étant sur l’un ou inversement”) のことだとするものである。ここで「二重の定式」とされているのは、b30-32 と、まだ本文を引用していなかった b32-33 のことである (まず、太字にした一重下線部に、次に、イタリックにした二重下線部に注目していただきたい)。

17) 結論を先取りして言えば、C.&N. からすると、この箇所でのアリストテレスが、「《一》について話題にすることなく、ただ《存在》についてだけ扱う」などということはないのである。C.&N. によれば、「《存在》が《一》よりも先であるとかその逆の (《一》が《存在》よりも先であるという) 考えを完全に回避することを正確に目指して」(“destinée précisément à éviter toute idée d’une priorité de l’étant sur l’un ou inversement”) いるのだとされる。後述する。

18) 「要求されている平行関係」とは、続く C.&N. の言葉からして、《存在》(の観点) と《一》(の観点) の平行関係——「厳格な同値関係にあること」(rigoureuse equivalence) とも言われる——のことであろう。

19) 「《存在》と《一》の間に」はギリシア語原文にはない、つまり、ギリシア語では、“b29 δῆλον δ’ ὅτι οὐ χωρίζεται” における “οὐ χωρίζεται” (「分かれていない」) の主語は明記されておらず、C.&N. の解釈であって、後述するように議論の余地がある。(なお、C.&N. のような理解で訳す近代語訳としては、たとえば、Lasson, 1924, “Demnach ist offenbar das Sein von dem Eins weder wenn etwas entsteht noch wenn etwas untergeht zu trennen” がある。下線による強調は筆者。) 私は、以下で、トマスによる別の解釈を紹介し、これに賛成するつもりである。

## 【C.&amp;N. 版の 1003b29-33】

b29 δῆλον δ' ὅτι οὐ χωρίζεται οὐτ' ἐπὶ γενέσεως οὐτ'  
 30 ἐπὶ φθορᾶς, ὁμοίως δὲ καὶ ἐπὶ τοῦ ἐνός ὥστε φανερόν ὅτι  
 31 ἢ πρόσθεσις ἐν τούτοις ταῦτὸ δηλοῖ, καὶ οὐδὲν ἕτερον τὸ ἐν  
 32 παρὰ τὸ ὄν.  
 [次の b32-33 は先に引用しなかったものである]  
 32 ἔτι δ' ἡ ἐκάστου οὐσία ἐν ἐστὶν οὐ κατὰ συμβε-  
 33 βηκός, ὁμοίως δὲ καὶ ὅπερ ὄν τι —.

こうやって C.&N. によってうながされ原文で見ると、確かに、“ὁμοίως δὲ καὶ” という句が、b30 と b33 で、たとえギリシア語が訳せなかったとしても分かるであろうほど明白に繰り返されている<sup>20)</sup>。この繰り返しがつまり「二重」ということなのだが、《存在》と《一》の「厳格な同値関係」を、すなわち、アリストテレスが「《存在》が《一》よりも先であるとかその逆の（《一》が《存在》よりも先であるという）考えを完全に回避することを正確に目指して」いることを見る C.&N. にとっては、単に「二重」であることだけが、このポイントなのではない。“ὁμοίως δὲ καὶ πὶ τοῦ ἐνός”（「《一》の場合もまた同様である」）に続けて、“οὐδὲν ἕτερον τὸ ἐν παρὰ τὸ ὄν”（「《一》は《存在》とは別のものではない」）と、《一》から《存在》への方向性をもつことを述べ、次に、“ἔτι δ' ἡ ἐκάστου οὐσία ἐν ἐστὶν οὐ κατὰ συμβεβηκός”（「さらにまた、おのおののものの根本存在が《一》であるのはたまたまではない」）と、《一》への方向性をもつことを語るのだが、「特別扱いはされるリスクが今度《一》にあるかのように」（“comme si cette fois c'était l'un qui risquait de se voir privilégier”）、「アリストテレスはすぐにそれに付け加えて」（“Aristote d'ajouter aussitôt”），“ὁμοίως δὲ καὶ ὅπερ ὄν τι”（「《存在》するなにかであるもの」（“ὅπερ ὄν τι”）もまた同様である」）と語り、《一》から《存在》へ反転するのである。結局、「《存在》から《一》（b29-30）、《一》から《存在》（b30-32）、《存在》から《一》（b32）、《一》から《存在》（b33）」という絶え間ない往復運動が記述されていることになる。これを、C.&N. は、「《存在》と《一》の間で不断に釣り合いをとることの強い関心」（“sousi d' un équilibre constant entre l'être et l'un”）と表現している。

第三章 私的判断：Cassin/Narcy の批評、Ross の問題点をクリアーしている点が評価できるが新しく問題が生じている。同じく Ross の問題点をクリアーしており、Cassin/Narcy の問題を生じさせないトマス・アクィナスの読み筋の紹介と支持

では、C.&N. の、以上のような説について批評する。

まず、Ross の問題点として指摘した、(一) 解釈の根拠となるアリストテレスの写本上の根拠がなく、シュリアノスの言葉に頼っていること、また、(二) 丸括弧を使って問題の文の直前にある“δῆλον δ' ὅτι οὐ χωρίζεται οὐτ' ἐπὶ γενέσεως οὐτ' ἐπὶ φθορᾶς” を文脈から排除していることを、C.&N. は、クリアーしている点が評価できる。すなわち、C.&N. の本文は、信頼度の高い EJ 写本にしたがっ

20) これが先の「b30 の “ὁμοίως δὲ καὶ” («de même exactement») という句は、どこと対になっているのか」の答えとなる。つまり、b33 の “ὁμοίως δὲ καὶ” («de même exactement») だったのである。

ており、かつ、C.&N. は、b29-30 の “*δηλον δ’ ὅτι οὐ χωρίζεται οὐτ’ ἐπὶ γενέσεως οὐτ’ ἐπὶ φθορᾶς*” を自己の解釈の重要な要素として組み込んでいる。

しかし同時に新しい問題も引き起こしてしまっている。すなわち、b29-30 に関する C.&N. の解釈の「それ [= 分離] を人が置くのは、生成と消滅の観点、すなわち、《存在》のそれ [= 観点] から、あるいは、《一》の観点からなのである」(“*qu’ on se place du point de vue de la génération et de la corruption, c’est-à-dire celui de l’être, ou du point de vue de l’un.*”) の「生成と消滅の観点、すなわち、《存在》の観点から」(“*du point de vue de la génération et de la corruption, c’est-à-dire celui de l’être*”) という部分についてである。「《存在》と《一》の平行関係」「不断の釣り合い」という立場からして、ここでは、「《一》の観点」——ギリシア語では直後に来る b30 の “*ὁμοίως δὲ καὶ ἐπὶ τοῦ ἐνός*” の “*ἐπὶ τοῦ ἐνός*” に当たる——と「釣り合い」がとられるはずの（しかしテキストに直接的には存在しない）「《存在》の観点」を、「生成と消滅の観点」に割り振るしかないという彼らの立場は理解できるのだが、どうして、「生成と消滅の観点」が、ただちに（「すなわち」(“*c’est-à-dire*”)), 「《存在》の観点」になるのかの詳しい説明がなく<sup>21)</sup>、この点で説得力に欠けるように思われる。b30 の “*ὁμοίως δὲ καὶ ἐπὶ τοῦ ἐνός*” の解釈がそもそもの問題の始まりであったのだから、この句の解釈に説得力がないことは致命的であろう。

さらに、確かに、“*ὁμοίως δὲ καὶ*” という句が、b30 と b33 で、繰り返されているのだが、しかしそのあとが、“*ἐπὶ τοῦ ἐνός*” と “*ὅπερ ὄν τι*” とで、C.&N. 自身の指摘した「エピ+属格」の構成が対応していない。また、“*ὅπερ ...*” は、アリストテレスでは通常、本質的になにかであることを表し、C.&N. も最初は、“*il est essentiel à l’essence d’être un étant*” とするのだが、結局、“*c’est à la lumière de ce sousi d’un équilibre constant entre l’être et l’un que nous comprenons ici l’expression ὅπερ ὄν τι (33), «ce qu’ est quelque chose qui est»*” としている。“*«ce qu’ est quelque chose qui est»*” は、本質性を表現しているようには見えない。

以上の二点が、C.&N. の解釈が、Ross の二つの問題点をクリアーしながら、しかし、引き起こ

21) アスクレピオス (236, 25-26) の「たとえば、人間が生成するとは、存在する人間が生成することであり、人間が消滅するとは、存在する人間が消滅することである」(“*οἷον γίνεται [εἶς] ἄνθρωπος, γίνεται ὄν ἄνθρωπος, φθείρεται [εἶς] ἄνθρωπος, φθείρεται ὄν ἄνθρωπος*”) で示唆されているように、「生成」が「《存在》の獲得」で「消滅」が「《存在》の喪失」であるとか、あるいは、「生成と消滅」の「基底に《存在》がある」とかなのは確かかもしれないが、しかしそれにしても、やはり、「すなわち」という言い換えの関係であるとは思えないし、そもそもこのアスクレピオスの解釈は、「生成においても消滅においても分離しない」の主語が「人間と存在」になるということである（アスクレピオスのテキストの校訂者 Hayduck にしたがって “*εἶς*” を削除した場合、Tricot, 1966/1986, p.180, n.3 は、この削除案に賛成していない。削除案に賛成しない場合、Tricot は “*il est évident que l’être de l’homme ne se sépare de son unité, ni dans la génération, ni dans la corruption, et, parareillement aussi, l’Un ne se sépare pas de l’Être*” と訳しており（二種類の下線による強調は筆者）、ここで、「(人間の)《存在》が《一》から分離されない」ことを含意し、「《一》の場合も同様である」で、[一般化して]「《(大文字の)一》も《(大文字の)存在》から分離されない」ことを含意するという理解の線をとることになる。私には、これが、C.&N. の「《存在》と《一》の間の不断の釣り合い」というアイデアの原型ではないかと思われた。なお、Tricot のこの訳について付言すれば、「生成においても消滅においても分かれぬ」の主語として「人間」を含めるのはいいが、この文の段階で、「《存在》」だけではなく「《一》」も含めてしまうと、その次の「《一》の場合も同様である」が宙に浮いてしまうので、人間の事例から離れて、つまり一般化して、「《(大文字の)一》も《(大文字の)存在》から分離されない」とし、議論のレベルに差をここでもうけて有意味さを出したのには、解釈に無理が出ていると思われる。)

してしまった新たな問題である。

そこで、私が着目したいのが、古びることのない地に足のついた解釈喚起力をもつトマス・アクィナスの『「形而上学」注解』における解釈である。そして、ポイントは、(一) そもそもの問題の始まりである b30 の “ὁμοίως δὲ καὶ ἐπὶ τοῦ ἐνός” を、直前 (b29-30) の “δῆλον δ’ ὅτι οὐ χωρίζεται οὔτ’ ἐπὶ γενέσεως οὔτ’ ἐπὶ φθορᾶς” と無理なく結びつける解釈、そして、(二) 本質性を表す “ὅπερ ὄν τι” を、ここでの《存在》の議論に、C.&N. のような無理をすることなく、組み込むということである。

(一) トマスの b30 “ὁμοίως δὲ καὶ ἐπὶ τοῦ ἐνός” 解釈は、第 552 項にある。

まず、b29-30 の “οὐ χωρίζεται οὔτ’ ἐπὶ γενέσεως οὔτ’ ἐπὶ φθορᾶς”<sup>22)</sup> について、

“ens et homo non separatur in generatione et corruptione.”

つまり、b29-30 のギリシア語本文では明示されていない主語は、「《存在》(“ens”) と人間 (“homo”)」(ギリシア語では「オーン」と「アントローポス」) だとトマスは理解している<sup>23)</sup>。

トマスは、これに続けて、b30 “ὁμοίως δὲ καὶ ἐπὶ τοῦ ἐνός” について、

“similiter apparat de uno. Nam cum generatur homo, generatur unus homo: et cum corrumpitur, similiter corrumpitur.”

22) 1003b26-33 のラテン語の 4 つの訳を参考のため、次に挙げる。

**Translatio Iacobi sive ‘Vetustissima’**: idem enim est ‘unus homo’ et ‘homo’, et ‘cum sit homo’ et ‘homo’, et non alterum aliquod demonstrat secundum dictionem replicatum quod ‘est homo’ et ‘homo’ et ‘unus homo’ (constans autem est quod non separantur neque in generatione neque in corruptione), similiter autem et in uno, quare manifestum est quoniam appositio in istis idem ostendit, et nichil alterum preter ens unum, amplius autem uniuscuiusque substantia unum est [et] non secundum accidens, similiter autem et quod vere ens aliquod est;

**Translatio Composita sive ‘Vetus’**: **Translatio Iacobi sive ‘Vetustissima’** と同じ。

**Translatio Anonyma sive ‘Media’**: idem enim et unus homo et ens homo et homo, et non diversum aliquid ostendit secundum dictionem repetitam ipsum « est homo et homo et unus homo » (palam autem quia non separantur nec in generatione nec in corruptione); similiter autem et in uno, quare palam quia additio in hiis hoc ostendit, et nichil aliud unum preter ens, amplius autem cuiusque substantia unum est non secundum accidens, similiter et quod ens aliquod.

**Recensio et Translatio Guillelmi**: Idem enim \* unus homo ET HOMO, et ens homo et homo, et non diuersum aliquid ostendit secundum dictionem repetitam \* ‘est homo et unus homo’; palam autem quia non separantur nec in generatione nec in corruptione. Similiter autem et in uno, quare palam quia additio in hiis IDEM ostendit, et nichil aliud unum preter ens. Amplius autem cuiusque substantia unum est non secundum accidens, similiter AUTEM et quod QUIDEM ens ALIQUID.

付言すれば、**Translatio Iacobi** の “cum sit homo” は実に不思議な訳し方である。cum と接続法の sit ということは、理由(「人間であるから」と解していると思われるが、ヤコブの見たギリシア語がそうになっていたのか、ギリシア語の “ὄν ἄνθρωπος” をそのように解したのか。興味は尽きないが手がかりがなく、残念ながらよく分からない。

23) このような訳し方は、近代語訳にもある。たとえば、Rolfes, 1904, “offenbar wird aber auch beim Entstehen und beim Vergehen Mensch und Seiendes nicht getrennt.” (下線による強調は筆者。)

つまり、状況として、また、直前と同じく、「生成と消滅」を想定して、動詞化した「生成する」(“generatur”)と「消滅する」(“corrumpitur”)の主語として、今度は、《存在》(“ens”)ではなく、《一》(“unus”)を含めて、「《一》と人間」(ギリシア語で「ヘイス」と「アントローポス」)を考えるわけである。

これは、b30“ὁμοίως δὲ καὶ ἐπὶ τοῦ ἐνός” 解釈を、b29-30の“οὐ χωρίζεται οὐτ’ ἐπὶ γενέσεως οὐτ’ ἐπὶ φθορᾶς”との自然な流れにのせており、《存在》と《一》を直結させるのではなく、ここでの議論で重要な役割を果たしている「人間」を媒介に出来ている点で、適切であると思われる。

(二)“ὅπερ ὄν τι”を、ここでの《存在》の議論に、C.&N.のような無理をすることなく、しかも本質性を表すものとして、組み込むことについて。

従来、“ὄν ἄνθρωπος”を、たとえば、“existent man” (Ross), すなわち、「実在する人間」と訳してきた<sup>24)</sup>。しかしそのように解さない者もいる。トマスがそうである<sup>25)</sup>。

トマスは、n.550において、“ens homo”に、“vel quod est homo”と続けて、言い換えをしている(“vel”を言い換えの「あるいは」ではなく“and”の意味にとって等値していると理解しても以下に影響はない)。ここにおいて、“ens”は、“quod est homo”の“est homo”(「人間である」)の“est”(「である」)として機能しているのは明白である。そしてこれは「実在する」という意味ではない。

n.551でも、“Idem enim est generari et corrumpi hominem, et id quod est homo”と述べているが、“id quod est homo”の“est”も、「～である」であって、「実在する」という意味ではない。

したがって、トマスの理解による、問題の三つの項は、

- (1) homo
- (2) ens homo = id quod est homo
- (3) unus homo

となる。そして、「人間である」の「である」は、明らかに、本質的な「ある」なのである。

また、トマスが、n.553において、

24) 他に英訳で“a man that is”(Kirwan, 1971/1993)や“a human who is”(Reeve, 2016)独訳で“Mensch, der da ist”(Zekl, 2003)という訳し方もある。いずれにせよ、「人間」が主語の位置に立つのが特徴である。後述するように、「人間」が述語の位置に立つように訳すことも可能である。Bonitzの注解(1848-49, p.176)は、“essentia”だという理解である。私が一番ユニークであると考えられる訳は、“« être humain »”(Duminil & Jaulin, 2008)というものである(“« humain »”は形容詞なので、“« être »”の主語に立てるようには見えないし、“« être »”も「である」にしか見えない)。諸訳の網羅的な比較は、今回はできなかった。他日を期したい。

25) ここで、シュリアノスの古註(61, 6-9)の英訳も挙げたい。すなわち、O’Meara & Dillonは、“First (1003b26-7), that ‘man’ and ‘one man’ and ‘being [a] man’ show the same thing. Even if I say ‘being one man’, I do not say something different (for what is doubled, even if it be tripled, indicated the same thing).”と訳している。私が下線で強調した“‘being [a] man’”(“τὸ ὄν ἄνθρωπος”)を見ていただきたい。この“‘being’”は明らかに「実在する」という意味ではなく「～である」の意味である。Rossが自分の解釈の立脚点とした言葉“εἷς ὄν ἄνθρωπος”の彼らによる訳“‘being one man’”の“‘being’”も同様に「実在する」という意味ではなく「～である」の意味である。シュリアノスのギリシア語原文から直接明白にこう訳せるというわけではないのだが、重要であるので紹介した。“being a man”という訳自体は、Apostle, 1966にもある。

“Idem autem est quod habet essentiam et quidditatem per illam essentiam, et quod est in se indivisum.”

と述べている文で, “quod habet essentiam et quidditatem per illam essentiam” は, “ens” に相当し, “quod est in se indivisum” が, “unum” に相当することが文脈から分かる。すると, “ens” は, 「本質」 (“essentia”) や「何であるかということ」 (“quidditas”) と関係があることが, また, “unum” も, “in se” という言葉からして, 本質的な規定であることが分かる。

以上のような理解をもって, 1003b32-33 を振り返るとどうなるか。ギリシア語の本文と, ラテン語訳で一番正確な訳になっている **Recensio et Translatio Guillelmi** (ただし **Translatio Anonyma sive ‘Media’** を改訳した箇所を示すために大文字化されている語句を小文字に戻す) を挙げる。

32                    ἔτι δ’ ἡ ἐκάστου οὐσία ἐν ἑστίν οὐ κατὰ συμβε-  
33 βηκός, ὁμοίως δὲ καὶ ὄπερ ὄν τι —.

32                    Amplius autem cuiusque substantia unum est non secundum ac-  
33 cidens, similiter autem et quod quidem ens aliquid.

この文の前半は, 《一》であるのが, 「たまたま合わさったという仕方」 (“κατὰ συμβεβηκός”) なのではないという意味である。これは, 《一》であるのがそれ自体に即している, 言わば, 本質的であることを含意している。すると, 後半で「同様に」とは, 「同様に」, なにかであるのが, たまたまではなく本質的であるということになる。後半にはもう, “ὄπερ ὄν τι” (“quod quidem ens aliquid”) という言葉しか残っていない。したがって, ここでの文脈上, “ὄπερ ὄν τι” (“quod quidem ens aliquid”) が, 「なにかであるのが本質的であること」なのである (一般的にもそうであるが, ここでは文脈上そうであることが重要である)。

そしてトマスが, “ὄπερ ὄν τι” (“quod quidem ens aliquid”) が, “ens” に相当すると考えていることは, その部分を注解している n.555 の最後で,

“necesse est ... quod substantia rei sit una et ens per seipsam, et non per aliquid additum.”

と述べていることから明らかである。アリストテレスのテキストの文脈上そう考えなければならぬはずであるから, この読み筋に私は賛成する。そして, 私は, このあたりの箇所を, 基本的に, 「実在する人間」よりは, 「人間である」という路線を採りたいと考える (訳出が部分的に困難になる局面があるとしても)。さもないと, 「実在する」は「本質」を含意するとしてもするしかないであろう。(了)

## 文献

古代

*Commentaria in Aristotelem Graeca:*



Vol.VI-1: Syrianus, *In Aristotelis Metaphysica Commentaria*. Ed., Kroll, G., Berlin, 1902.

Vol.VI-2: Asclepius, *In Aristotelis Metaphysicorum Libros A-Z Commentaria*. Ed., Haydock, M., Berlin, 1888.

英訳: *The Ancient Commentators on Aristotle*:

Syrianus, *On Aristotle's Metaphysics 3-4*. Translated by O'Meara, D. and J. Dillon. London, 2008.

アスクレピオスの『「形而上学」注解』の英訳はない。

中世

S.Thomas Aquinas, *In duodecem Libros Metaphysicorum Aristotelis Expositio*. Ed., Cathala, M.R. / Spiazzi, R.M., Taurini / Romae, 1950.

*Aristoteles Latinus*:

XXV I-<sup>a</sup>: *Metaphysica Lib.I-IV.4: Translatio Iacobi sive 'Vetustissima' cum Scholiis et Translatio Composita sive 'Vetus'*. Ed., Vuillem-Diem, G. Bruxelles-Paris, 1970.

XXV 2: *Metaphysica Lib.I-X, XII-XIV: Translatio Anonyma sive 'Media'*. Ed., Vuillem-Diem, G. Bruxelles-Paris, 1976.

XXV 3.2: *Metaphysica Lib.I-XIV: Recensio et Translatio Guillelmi de Moerbeka. Editio Textus*. Ed., Vuillem-Diem, G. Leiden - New York - Köln, 1995.

近代 (年代順)

Taylor, Th., 1812/2003, *The Metaphysics of Aristotle. Translated from the Greek. (The Thomas Taylor Series, Vol.XXIII)*, Chippenham.

Bonitz, H., 1848-49/1992, *Commentarius in Aristotelis Metaphysicam*. 2 Vol. Bonn. (Reprint: Olms Verlag, Hildesheim/Zürich/New York)

Bonitz, H., 1890, *Aristoteles Metaphysik. Aus dem Nachlass herausgegeben von Eduard Wellmann*. Berlin.

Rolfes, E., 1904, *Aristoteles' Metaphysik. Übersetzt und mit einer Einleitung und erklärungen versehen*. 2 Bde., (PhB, 2&3), Leipzig.

Lasson, A., 1924, *Aristoteles Metaphysik. Ins Deutsche Übertragen*. Jena.

Ross, W.D., 1924, *Aristotle's Metaphysics: A Revised Text With Introduction and Commentary*. 2 vols., Oxford.

Ross, W.D., 1928, *Metaphysica*. 2nd ed. (*The Works of Aristotle*, Vol.8), Oxford.

Jaeger, W., 1912, *Studien zur Entstehungsgeschichte der Metaphysik des Aristoteles*. Berlin.

Jaeger, W., 1957, *Aristotelis Metaphysica. (Oxford Classical Text)* Oxford.

Apostle, H.G., 1966, *Aristotle's Metaphysics. Translated with Commentary and Glossary*. Bloomington and London.

Tricot, J., 1966/1986, *Aristote La Métaphysique. nouvelle édition entièrement refondue, avec commentaire*. 2 vol., Paris.

Bernardinello, S., 1970, *Eliminatio Codicum della Metafisica di Aristotele*. Padova.

Kirwan, C., 1971/1993, *Aristotle Metaphysics Books Γ, Δ, and E. Translated with Notes*. Oxford.

Cassin, B. et Nancy, N., 1989, *La Décision du Sens: Le livre Gamma de la Métaphysique d'Aristote, introduction, texte, traduction et commentaire*. Paris.

Zekl, H.G., 2003, *Aristoteles Metaphysik. Übersetzt, und mit einer Einleitung und Anmerkungen versehen*. Würzburg.

Duminil, M.-P. et Jaulin, A., 2008, *Aristote Métaphysique: Introduction, traduction, notes, bibliographie et index*. Paris.

Hecquet-Devienne, M., 2008, *Aristote Métaphysique Gamma: Édition, Traduction, Études. (Introduction, texte grec et traduction par M. Hecquet-Devienne, Onze études réunies par A.Stevnes)*, Louvain-La-Neuve.

Bülow-Jacobsen, A., 2009, *Writing Materials in the Ancient World*. In: Bagnall, R.S., ed., 2009, *The Oxford Handbook of Papyrology*. Oxford. pp.3-29.

Primavesi, O., 2012, *Aristotle Metaphysics A: A New Critical Edition with Introduction*. In: Steel C., ed., 2012, *Aristotle's Metaphysics Alpha. With a new critical edition of the Greek Text by Oliver Primavesi*. Oxford.

Reeve, C.D.C., 2016, *Aristotle Metaphysics. Translated with Introduction and Notes*. Indiana.

Kotwick, M.E., 2016, *Alexander of Aphrodisias and The Text of Aristotle's Metaphysics*. California.

なお、本注解は、平成30年度～令和2年度科学研究費基盤研究（C）（一般）課題番号18K00022 研究課題名「哲学の勧め及び哲学の歴史と歴史の哲学に関するアリストテレスの第一哲学構想の研究」の研究成果の一部である。